

ベートーヴェン：交響曲第5番八短調 Op.67「運命」

第6番「田園」とは、性格が違う双子の兄弟のような関係にある第5番は、たとえ「運命」というタイトルが後付けのものともわかっていても、壮大なドラマを感じずにはいられない。ベートーヴェンと同時代の作家 E.T.A.ホフマンも、「この驚くべき作品は一步一步昂まってゆくクライマックスの中で、聞き手を否応なく無限の冥界へと引きずり込む（伊刈裕 訳）」と述べている。八短調の「運命」の動機で開始され、最後は八長調の「歓喜の叫び」（ホフマン）に至るという道筋が、全楽章を通してみえてくる。

だが、第5番が聴き手を「引きずり込む」のは、苦悩から歓喜へという物語の設定ばかりでなく、作曲の手法によるところが大きい。第1楽章は、「運命」の動機を成す4つの音がほとんど隙間なく埋め込まれ、穏やかな第2主題でさえ、この4つの音（ホルン）で開始される。第3楽章のホルンで開始される主題も同じリズムの拡大形であるなど、すべての楽章が、一見全く別のようにみえてもこの主題と内的に結びついており、聴き手の心を離さないのである。

なお、ベートーヴェンは交響曲で初めてトロンボーン、ピッコロ、コントラファゴットを用いた。これらは終楽章に輝かしい響きを添えている。

第1楽章 アレグロ・コン・プリオ、八短調：4つの音からなる運命の動機が縦横に張り巡らされている。

第2楽章 アンダンテ・コン・モート、変イ長調：変奏形式。途中に「運命の動機」の短縮形が聞こえる。

第3楽章 アレグロ、八短調：スケルツォ風の楽章。「運命」のリズム動機が用いられている。切れ目なく次の楽章に続く。

第4楽章 アレグロ、八長調：前の楽章からのクレッシェンドを受けて、フォルティッシモの総奏で輝かしく開始される。運命の動機に似た3連符の主題も現れる。

遠山菜穂美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

<楽器編成>

ピッコロ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、
コントラファゴット、ホルン2、トランペット2、トロンボーン3、
ティンパニ、弦五部

※スコア上の表記